

東日本支部だより

2004年2月20日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第 11 回定例研究会

時 2004年3月13日(土)

所 お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 304 教室
(地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅下車)

○2003 年度卒業論文・修士論文発表(その1)

◆東日本支部第 12 回定例研究会

時 2004年4月3日(土)

所 東京藝術大学音楽学部 5-301 教室
(JR 上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

○2003 年度卒業論文・修士論文発表(その2)

※詳細につきましてはチラシをご参照ください。

定例研究会の報告

◆東日本支部第8回定例研究会

2003年10月4日(土)上野学園日本音楽資料室

●研究発表

1. 音響と音韻からみた膜鳴楽器音のトルコ語口唱歌

井土慎二

(発表要旨)

口唱歌に関する議論においては、ある言語音(すなわち口唱歌で使われる音)の音象徴性の認定は事実上個人的差異等に依存し得る基準に依っていることが多い。本稿では、口唱歌の音象徴性を認定するための客観的な基準となり得る候補の一つとして特に Ohala (1983;

1984; 1993)の frequency code を取り上げる。

データにはトルコ音楽におけるウスールと呼ばれるリズム周期をあらわす際に使用される音節を使用する。この音節の音声、音韻、その成立過程の分析を通して、この音節が現在の形をもつ音声的、音韻的必然性があるか、あればその必然性は何によってもたらされているかを探る。

ウスールについての簡単な説明を行う導入部に続く本論では、この音節 *düm* と *tek* についての既往のコメントを概観しつつ、音声学的分析を行う。まず、母音音素 /*ü*/ と /*e*/ の *düm* と *tek* における異音である [ɣ] と [ɛ] のスペクトル分析などを通して、*düm* と *tek* が音象徴における制約に従っており(即ち frequency code にもしたがっており)、音象徴語と認められることを示す。

しかし、*düm* と *tek* には音象徴語としてはやや不自然な特徴があることも上記の分析を通して明らかになる。その特徴とは「第二フォルマントの値と発音体の大きさ(=音の高さ)は対応する」という音象徴の制約にしたがっていないながらも、[ɣ] と [ɛ] の第二フォルマント値の間の差が小さいということである。第二フォルマント値の差がより大きくなる母音の組み合わせがあるにもかかわらず、[ɣ] と [ɛ] が使われていることは frequency code の観点からするとやや不自然であると考えられる。本稿はこの特徴がうまれた原因に関しては、「アラビア語の *dumm* と *tak* のトルコ語への借用」の可能性を、トルコ語借用音韻の簡介を行いつつ、示唆するに留める。

(コメント・瀧 知也)

井土氏は言語学の立場から発表された。「口唱歌が音象徴語である為には再現性や普遍性が必要であり、それらは計量的に量れるものにしか存在しない」と定義づけた上で、トルコ語口唱歌の音響特性を、母音の周波数域「第二フォルマント(F2)」に関する実験的データに基づいて説明された点が斬新であった。含まれる母音F2値の差が小さい *düm* と *tek* がなぜ用いられているのか、それを母音調和とアラビア語からの借用(の可能性)の観点から考察されている。アラビア語とアラブ音楽、インド音楽の口唱歌に通じた立場からの質問を含め、実際の耳による知覚とF2の差異との関係について質疑

が上ったが、いずれに対する返答も確固たる答えには至らなかったように思われる。「世界の音楽における口唱歌は多様で、音響特性によってのみ作られている訳ではない。トルコ語口唱歌の場合、音象徴性が高いに過ぎない。」という司会者による示唆を今一度念頭におく必要があるだろう。

2. さあ、ともに座ろう

—東洋系ユダヤ人の歌と音楽に関わる習慣と行動—

屋山久美子(ヘブライ大学、テルアビブ大学)

(発表要旨)

メリアムは、古典的著書『音楽人類学』(1964)において、「文化の総体」に組み込まれている音楽を捉えるための一つの指針として、音楽を支える行動という観点を強調した。本発表は、エルサレムの東洋系ユダヤ人たちの音楽文化における行動と習慣を、最も基本的な人間の行動の一つである「座る」という観点から、観察し、考察した上、そこから描き出される彼らの音楽文化の特徴を示そうというものである。

ヘブライ語の「座る(語根 Y.SH.B)」という語は、幅広い意味を持っており、ユダヤ人の様々な行動や慣習を示すのに用いられるが、「座る」という行動、用語、用語を使った言述は、彼らの音楽文化の中でユニークなもので現れている。彼らの音楽を生み出す条件や音楽を生み出す状況と関わる「座る」という行動とその言述は、彼ら流の表現をもとに5つの点からまとめられる。1. 「テーブル・いすの準備はできたか」—音楽・歌が行われる場の背景、2. 「それは、君の席だよ」—音楽・歌が行われる場の席順と秩序、3. 「昨夜、3時間座りっぱなしで聞き続けたんだ」—歌い手たちの音楽聴取のあり方、4. 「私は、彼(歌い手)と座った」—音楽と歌の習得、5. 「いっしょに座って、呼吸がピタリと合えば…」—共に座って、共に歌うという行動による共同体的音楽体験、である。

東洋系ユダヤ人にとって、準礼拝音楽活動が行われる場は、歌の集いの場であり、それは喜びを歌によって表す場である。この宗教文化的な歌の集いには、全ての参加者が、気持ちよく席に着き、歌の世界に入っているような「歌の座」の背景づくりがなされ、歌い手たちは、歌唱力のレベルによって、慣習的に決められた席に座って、歌の集いを進めていく。また、歌い手の、集中的で、積極的な音楽聴取の態度や師匠からの音楽や歌の継承のあり方も座るという身体的な行動とそれに関わる言述と直接的なつながりがある。さらに、彼らの歌の集いでは、参加者全員が合唱部分を一致して歌うことと独唱者その他の参加者の相互作用が重要な要素だが、彼らはこれが成功したとき歌による共同意識を確かめ合う。このときにも「共に座る」という行動が大きな意味を持

つ。

(コメント・瀧 知也)

「座る」ことに対するエルサレムの東洋系ユダヤ人の認識と習慣、および準礼拝音楽の場シラート・ハバカシヨートに集う歌い手達の席順とそれをめぐる人々の会話や考え方を興味深く聴いた。歌唱能力に優れた公認のリーダー的歌手は、同時に社会コミュニティーにおいても目される存在で、シナゴグの上手壁沿いに内側を向いて座り、彼らと向き合っただけで人々が並列に座る独特な形態が映像資料でも示された。リーダーの座る位置は音楽の実践上不利ではないか、および音楽能力の水準や価値観について(小日向英俊氏)、また首席唱者の人数と席順について(柘植元一氏)質問があり、比較的小さなシナゴグにおける事例で、普段とは異なる席順である、壁側からも声は十分届く、リーダーはよく響く声を持ち、マカームの知識と実践能力に長けた者である、中堅の名実ともに優れた歌手二三人が主席に就くが主席歌手の座順は厳密ではないといった返答がなされた。

◆東日本支部第9回定例研究会

[第3(通算 73)回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会東日本支部合同例会]

2003年12月13日(土)

日本大学芸術学部 江古田校舎 小講堂

●研究発表とシンポジウム

古代・中世の出土竹笛をめぐって

I 研究発表

古代・中世の出土竹笛をめぐって

山田光洋(横浜市ふるさと歴史財団)

(発表要旨)

竹は残りにくい材質であり、遺跡からの竹笛の出土は少数であるが、この10年ほどの間に出土例が増加した。横笛は、江平、清水、市川橋(2点)、百間川当麻、下古館の5遺跡6例である。尺八は、洲崎、蛇喰A、朝倉氏の3例である。また、それら以外の竹笛としては蔵小路西の例(箏築か?)があり、栄町からは、白磁製の「大◆」あるいは「中◆」と考えられる遺物が出土している。その他、竹笛としての蓋然性が乏しい市川橋、上品濃蟹川の2例がある。各々の竹笛の作りは全て異なってい

る。

横笛には節から管尻までの丁度 1/2 の位置に指孔が開けられているという共通点がみられる。節～管尻の 1/2 の位置に開けられている指孔は、歌口から第1孔目もしくは第2孔目の2通りある。横笛についてはさらに、節～管尻を管長と仮定し、三分損益法との関係を調べた。実測図に各音の勘所をプロットしたところ、一致する指孔と一致しない指孔があり、直接の関連は認められなかった。しかし、古代、中世各時代で、管長に対する指孔の間隔の比率に共通性が看取されることが明らかになり、間隔の比率に相違があるものも、その差は半音分以内に収まることが分かった。勿論、横笛の場合、三分損益法の勘所は実際に出る音程とは無関係であるため、管長の分かるまたは推測できる横笛について、アクリルパイプを材料に復元制作を行い、音程の計測を行った。管長は、節の実用性を考慮して節から管尻を想定した。歌口の小さなものは一つの指使いで出せる音域は狭く、大きいものはカバーできる音域が広いことが分かった。

尺八は、節と指孔の位置から、洲崎遺跡および蛇喰A遺跡の出土品が古代尺八と一節切との中間的な形態を示すと考えられ、中世尺八の歴史を明らかにしていく上で貴重な資料である。朝倉氏遺跡出土品は一節切である。

竹笛の出土例はまだ少なく、結論を導くには時期尚早である。今回は出土例と分析結果の提示にとどめる。

II シンポジウム

古代・中世の出土竹笛をめぐって

パネリスト:

山田光洋

高桑いづみ(東京文化財研究所)

美濃晋平(笛研究家)

司会:笠原 潔(放送大学)

(報告・笠原 潔)

東洋音楽学会合同例会では、山田光洋氏の研究発表「古代・中世の出土竹笛をめぐって」に続いて、同名のタイトルによるシンポジウムが行われた。

冒頭、パネリストの一人、高桑いづみ氏から、鎌倉時代の仏像の胎内から発見された三点の竹笛が紹介された。

一点は、広島県福山市の金宝寺(後、安国寺)の阿弥陀三尊像(文永十一年、1274年)の胎内に収められていた七指孔の笛。全長 40.7 センチの龍笛であるが、指孔部分は表皮を剥かず、谷グリも施していない。樺巻きは、桜皮ではなく、麻糸を巻いた上から透き漆を塗布

していると見られる。「セミ」は、別材を埋め込むのではなく、小枝を取り去っただけであり、また、雄竹の一本作りであるといった点で、通常見られる龍笛とは異なる製作法を取っていることが紹介された。ただし、こうした特徴は、東京国立博物館所蔵の龍笛「はまつと」や彦根城博物館所蔵の龍笛「斑鳩丸」(いずれも、鎌倉時代と伝えられる)と共通しているという。

もう一点は、京都・大原の寂光院の地蔵菩薩像(寛喜元年、1229年)の胎内で発見された六孔の横笛である。現存長 27.4 センチ(管尻部分欠損)で、雄竹の一本作りである。他の一点は、京都・嵯峨野の清涼寺の地蔵菩薩像(承久三年、1221年)の胎内で発見されたやはり六孔の横笛で、全長 27 センチ前後と見られる。この二点の横笛は、プロポーシオンは神楽笛や高麗笛と似るものの、はるかに短い。事実、出席していた田中敏長氏による復元品が披露されたが、通常の高麗笛・神楽笛に比べてはるかに小型の笛であったことが出席者を驚かせた。

高桑氏は、さらに、清涼寺の笛は、節から管尻までの長さの 1/2 の個所に(歌口側から数えて)第一指孔を開け、また、歌口から管尻までの長さの 1/2 の個所に第二指孔を開けている点で岡山市百間川当麻遺跡出土の横笛(鎌倉時代)と共通した設計プランに従っていること、両者はサイズの的にも似ていること、また、寂光院の笛もほぼ同じ設計プランに従っていたと見られること(ただし、管長はこちらの方が多少長かったようである)、といった点を指摘した。

こうして、遺跡から出土した横笛と仏像胎内に収められて伝世した横笛の中に、サイズの的にも、指孔位置の設計の点でも、一致する例があることが明らかにされた。

山田・高桑両氏の発表を受けて、もう一人のパネリスト美濃晋平氏は、過去には、従来から知られてきた龍笛・高麗笛・神楽笛とは別に、プロポーシオンは類似するものの、サイズが異なる笛が存在していたことをこれらの笛は物語っていると指摘した。

また、美濃氏は、現在、民俗芸能で使われる横笛の中には、旋律を吹くことを目的とせず、リズム的なあしらいを奏することを目的とした笛が存在することを指摘した。その例として、美濃氏は、田楽で使用される六ないし七指孔の笛の中に一ないし二指孔しか使用しないものがあること、佐渡の田楽笛には二指孔のものがあること、太宰府天満宮の祭礼で使用される七指孔の笛の場合、使用されるのは二指孔だけであって、残りの指孔はセロハン・テープで塞がれていることを紹介した。出席していた高橋美都氏も、春日若宮御祭で演奏される笛は同音の反復しかししないことを指摘した。こうした点からすると、宮城県多賀城市の市川橋遺跡から出土した三指孔の横笛(10世紀)は、美濃氏が言うところの「リズム楽器」的な使われ方がした可能性が浮かび上がってきた。また、美濃氏が紹介した佐渡の田楽に使用される笛に酷似した二指孔の横笛(幕末～明治初期)が、群馬県の

東長岡戸井口遺跡から出土していることが、出席していた群馬県埋蔵文化財調査事業団の石守晃氏から紹介された。

美濃氏は、さらに、管頭の節と歌口間の距離が長い場合、間に蜜蝋や紙礫を挿入しないと音程が悪くなることを指摘したが、それに連関して、出席者の田中敏長氏は、福島県江平遺跡出土の横笛(8世紀初頭)や宮城県市川橋遺跡出土のもう一点の横笛(9世紀～10世紀前葉以前)は、節と歌口の距離が短いために、詰め物をしなくても音程が良いことを復元品の試奏結果に基づいて指摘した。岡山市百間川当麻遺跡出土の横笛(鎌倉時代)や栃木県下古館遺跡出土の横笛(鎌倉～室町時代)も、管頭の節と歌口間の距離が短く、詰め物をしたとは思われない。これらの横笛も、詰め物なしで演奏されたのではなかろうか。なお、田中氏によると、復元品の試奏実験の結果、出土笛の発する音律は雅楽の音律に近いことが判明したという。

山田氏は、尺八類に属すると思われる三点の出土品を紹介する中で、福井県一乗谷朝倉氏遺跡出土のもの(1471～1573の間)は一節切であるが、秋田県州崎遺跡出土のもの(鎌倉～室町時代)と蛇喰A遺跡出土のもの(13世紀後半～14世紀)は、従来から知られてきた古代尺八・中世尺八・近世尺八のいずれとも相違する点があることを指摘した。出席者の志村哲氏も、かつては、従来から知られてきた古代・中世・近世の尺八の基準から外れた尺八類の楽器が存在していた可能性があることを指摘した。

これらの楽器を使用してどのような音楽が演奏されたかは現在の段階では不明であるが、出席者の遠藤徹氏が指摘したように、雅楽というジャンルにこだわることなく、今後も研究を積み重ねていかなければなるまい。いずれにせよ、シンポジウムの最後にパネリストたちが口を揃えて指摘したように、過去には、多様な音楽が行われていた可能性があり、地域ごとに異なった音楽が演奏されていた可能性があるし、それでいて、思い掛けない地域間に交流があった可能性もある。それらの芸能の中には現在には繋がらないものもあった可能性もある。そうした点を考慮しながら、今後、なお一層の研究を進めていく必要があることが確認された。

なお、シンポジウム終了後の意見交換の中で、島根県蔵小路西遺跡から出土した樺巻きの笛(中世)は箏篋の可能性が高いとの指摘が高桑いづみ・野川美穂子の両氏によってなされたことを付記しておく。

(コメント・遠藤 徹)

山田光洋氏の研究発表では、近年増加しつつある竹笛の出土例(12例)が詳細な資料を付して紹介され、その形態の分析から、節が管尻の真中に指孔が穿たれている共通点が見られるという指摘がなされた。またアクリルパイプを材料にした復元模造品による音律の測定値も示された。次いで行われたシンポジウムでは高桑いづみ氏によって、近年新たに確認されるに至った仏像の

胎内に納められた中世の横笛3例の紹介があった。いずれも仏像自体の造立年代から考えて鎌倉期にまで遡る遺品であるという。その中の寂光院の横笛については、高橋美都氏による試奏例と、田中敏長氏による模造試作品の吹奏の実例の紹介もあった。

これらの事例は、長年、笛の研究に携われた美濃平氏がシンポジウム中で「今昔の感」などと表現されたように、少し以前には考えられないような貴重な報告であり、古代・中世の日本音楽史研究に新たな視角をもたらすものといえる。また音律の測定値や吹奏例が提示されることによって具体的に奏でられた音楽を考察する材料が与えられたことも有りがたい。しかし全体に情報量が多かったため、提示された情報を整理し理解するのが精一杯であったというのが率直な感想である。一方、考古学的な出土横笛と仏像胎内納入品の横笛という伝来の事情が全く異なる事例がどのように結びつくことになるのか、発見された横笛が本来いかなる文脈で、いかなる様式の音楽に用いられたものなのか、楽器自体の作りや構造の意味、横笛を仏像胎内に納入することの文化的意義等々、今回の例会で投げ掛けられた課題は多い。もっとも、事例が未だ限られているため、今は早急に結論を得ようとするのではなく、問題意識を深めつつも、しばらくは地道に事例の把握にあたるのが大切のように思う。

定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のために、定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望日、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、学会事務局または東日本支部事務局までお申し込みください。現在申し込み可能な定例研究会は2004年6月、7月です。

発行:(社)東洋音楽学会東日本支部
編集:植村幸生、島添貴美子、永原恵三、黒川真理恵

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学文教育学部 永原研究室 気付
TEL:03-5978-5275 or 5279(音楽助手室)
FAX:03-5978-5276
E-mail: KFF01307@nifty.com(永原)
